

もくじ

南北朝動乱と花俣郷 … P1 トロッコで土を運んだ先は…「放水路開削のため引越」補遺… P3 あだち民具図典<sup>16</sup> 横槌… P4

# 足立史談

第656号

2022年10月15日  
足立区立郷土博物館内  
足立史談編集局  
〒120-0001  
東京都足立区大谷田5-20-1  
TEL 03-3620-9393  
FAX 03-5697-6562



【史料1】 正平7年5月24日付 新田義興充行状「水野家文書」  
縦15.2cm ×横21cm (個人蔵 画像提供：瀬戸市)

## 南北朝動乱と花俣郷

佐藤貴浩

足立の中世を考えると、これまでほとんど言及されていない南北朝時代の花俣郷（はなまたごう・足立区花畑）に関する文書がある。それは尾張国山田郡水野郷（愛知県瀬戸市）を本拠とする水野一族に伝わった「水野家文書」の内の一点である。

文書自体は『新編武蔵風土記』や『尾陽雜記』などに写りが採録されており、古くから知られていた。まずは「水野家文書」に基づき釈文を掲げる。  
【史料一】新田義興充行状

武蔵國足立郡内花俣

郷 秋山治郎 事、為勲功之

賞、所宛行也、者任先例

可致沙汰之状如件

正平七年五月廿四日

源朝臣（新田義興花押）

水野平太殿

年号の正平は南朝が使用したもので、北朝の観応三年にあたるが、九月二七日に改元されて文和元年となった。したがって、正平七年・観応三年・文和元年はいずれも西暦一三五二年である（以下、北朝年号を使用し、南朝年号を（ ）内に表記）。

なぜ、花俣郷に関する文書が尾張国の水野氏に伝来したのだろうか。本稿では、その点について若干の検討を加えたい。

■水野家文書 水野氏は桓武平氏の流れをくむ一族である。東海地方の水野氏といえば、徳川家康の生母の実家である三河国刈谷城主（愛知県刈谷市）水野氏が有名だが、こちらは源氏であり、別系統である。

「水野家文書」には、一六点の中世文書が伝来し、その内一一点が南北朝期のものである。【史料一】を含む「水野家文書」の中の八点は、通常の文書より小ぶりの小切紙が使用されており、いわゆる「髻繪じま」（もとのりんじ）髪の中に隠した密書）様のものである。

■水野致秋 【史料一】の宛所である水野平太は水野致秋（致顕）（むねあき）に比定される。致秋は父の死去により幼くして家督を継いだため、叔父の致国の後見を受けた。致秋が成長すると、水野氏の主導権をめぐって致秋と致国が争うようになる。

そのため足利尊氏と直義が争った観応の擾乱（かんのうのじょうらん）一三五〇～一三五二）が起こると、致秋は直義に属し、致国は尊氏に属して、それぞれ戦った。

■新田義興 【史料一】の発給者となる新田義興（にったよしおき）は、新田義貞の次男である。新田義貞は、



足利尊氏と対立し、延元三年（建武五年・一三三八年）に討死した。義興はまだ八歳であり、越後国に潜伏したようで、しばらく行方をくらます。再び義興の活動を確認できるのは、観応の擾乱後のことである。観応の擾乱は、観応三年（正平七年・一三五二）一月に尊氏が直義を降伏させ終結する。そして、直義は相模国鎌倉（神奈川県鎌倉市）に幽閉され、二月に急死した。一説には毒殺ともいう。すると、二二歳に成長していた新田義興は、後醍醐天皇の子である宗良親王を奉じて、尊氏打倒のために上野国から鎌倉へ向けて進軍を開始した。鎌倉にいた尊氏は、武蔵国まで退き、義興は一時的に鎌倉を抑えることに成功する。

閏二月二〇日、義興は武蔵国人見

原（府中市）・金井原（小金井市）で尊氏と戦い敗れ、鎌倉も失う。その後、三浦氏の支援を得て二八日に鎌倉を取り戻すが、結局、三月二日に義興は河村城（神奈川県山北町）へ逃走した。『太平記』によれば、翌年の春まで河村城に籠城したという。したがって、史料一は義興が河村城に籠城中に発給したことになる。

■関東における水野致秋 致秋は、直義に同行し、各地を転戦した。「水野家文書」の中から、直義没後の動向を示す文書を掲げる。

【史料二】 水野致秋軍忠状

水野平太「致□」申軍忠事  
右、自最前馳参御方、去月十九日自武州鶴見宿地参関戸、同廿三日三浦入御時令供奉、同廿八日鎌倉合戦致軍忠畢、其後至平塚宿令御共候上者、賜御判為備後証、言上如件、  
正平七年三月三日  
「二見了（新田義興花押）」

これによって、致秋が新田義興に「御方」（味方）して、閏二月一九日に鶴見宿（神奈川県横浜市鶴見区）から関戸（多摩市）に参陣したことがわかる。致秋は直義に属し、反尊氏であった。そのため、直義が死んだ後は、尊氏打倒を目指した新田義興に属したのだろう。

翌日に人見原合戦が起こっているので、致秋も参加したとみられる。しかし、義興が敗北すると、二三日に共に三浦（神奈川県三浦市）へ逃げ、二八日の鎌倉での戦いにも従軍した。河村城に向かつて逃走する途中の平塚までは致秋が義興に付き従ったことが確認できる。ただし、致秋も共に籠城したかは不明である。

■花俣郷の充行（あてがい） 義興が致秋に花俣郷を充行ったのはどのような背景があるのだろうか。

【史料一】には、花俣郷が「秋山治郎跡」と記されており、もとは秋山氏の所領であったことがわかる。しかし、秋山治（次カ）郎について詳細は不明である。同時代の讃岐国高瀬郷に秋山孫次郎泰忠という人物がいるが、同一人物の可能性は低く、不詳とせざるを得ない。

足立郡全体で見れば、鎌倉幕府が滅んだ元弘三年（一一三三）と推測される「足利尊氏・同直義所領目録」（比志島文書）によると、足立郡は尊氏の所領となつている。また、足立区内の板碑の年号ほとんどすべてが北朝年号を使用している。こうしたことから、花俣郷も北朝、すなわち尊氏の支配下にあったとみることができ、南朝の義興が支配権を有していたとは考えられない。

では、どうして自らの支配権が及んでいない花俣を与えたとする義興の宛行状が残っているのか。筆者は、【史料一】を義興の発給した空手形とみたい。つまり、水野致秋を味方にし続けるために、敵である尊氏の所領を勝手に致秋に与える文書を出したのだろう。未だ自分のものとはなっていない敵地を恩賞として与えることは珍しいことではなかった。この後の致秋の動向は不明だが、水野郷に帰ったとされている。推測に推測を重ねることになるが、史料一が発された頃、致秋は義興に見切りをつけ、離反しつつあったのではないだろうか。だからこそ、義興は空手形で引き止めようとしたのだと考えたい。ちなみに義興は、五年後、足利方に謀殺される。

花俣郷については、他に資料がなく詳細は不明であるが、【史料一】の存在により、南北朝動乱の中で、恩賞の対象となり得る地であったことが判明する。【史料一】は、南北朝期の動向を考える上で大変注目される史料である。今後、検討が進むことを期待したい。

【参考文献】

- 太田正弘「尾張水野文書の研究」『日本歴史』二八四、一九七二年
- 松島周一「水野致秋と新田義興」『歴史研究』四九、二〇〇三年
- （文化財係学芸員 佐藤 貴浩）

トロッコで土を運んだ先は…  
 「放水路開削のため引越」補遺  
 山崎尚之

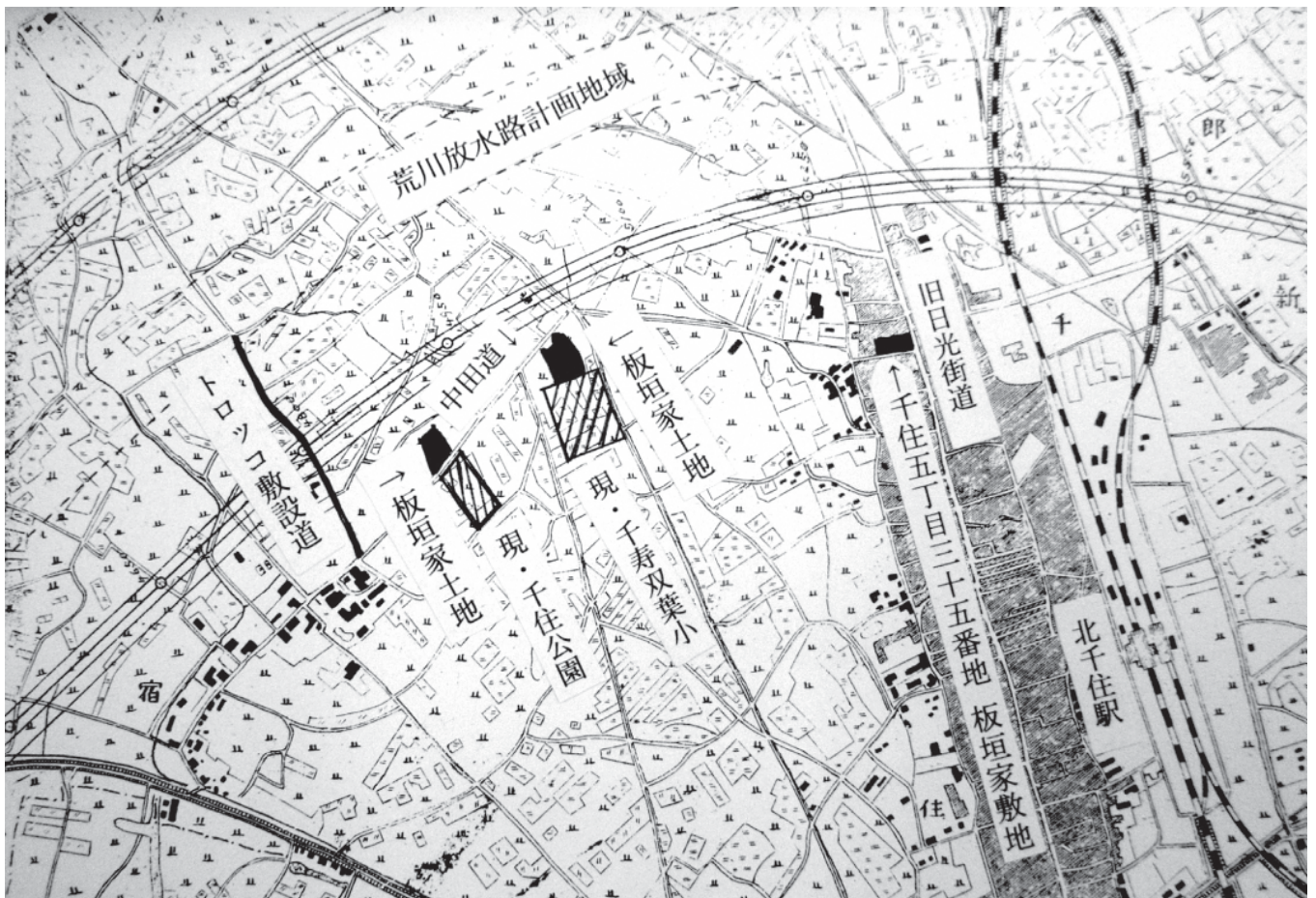
八月十五日発行の『足立史談』六五四号に掲載した「放水路開削のため引越・土もトロッコで引越・」を読まれた資料寄贈者の板垣様からいろいろとご教示をいただきました。そこでお教えいただいたことを訂正・補足として書き記すことで、荒川放水路開削前後の千住の道路事情などをもう少しお伝えしたいと思います。

六五四号では、千住五丁目三十五番地の宅地の埋立のために川田耕地の農地をはるばるとトロッコで運搬したのではないかと書きましたが、指摘ではそうではなくて現在の大川町の千住公園付近に所有する土地のかさ上げのために運んだということです。つまり、川田耕地（現在の千住新橋と西新井橋の間あたり）の土の採取地点から道沿いに南下して中田道（現在の千住公園の北側を東西に走る道）までトロッコを敷設して土を運んできて、そのトロッコの終点である中田道付近に所有する土地のかさ上げに使用しました。もともとこの場所には納屋や農地があったそうで、放水路敷地となる所有地を国に売却することで得た資金でさらに近辺の土地を買い増したとのこと。板垣家で

は、その場所で農作物の栽培を続けたわけではなく、農業の行末や千住の発展を見据えて、運んだ土で土地をかさ上げして長屋などの用地として借地経営を始めました。そのため、トロッコで土を運んだのはここまで（川田耕地から中田道に接するまで）で、その先の中田道にもトロッコを施設して千住五丁目の宅地まで土を運んだということはありませんでした。

ところで、千住五丁目三十五番地（住居表示は六番七号。現地籍六十六番地）の敷地（現在の中央図書館南側の道路＝通称板垣道路を東に進み旧日光街道に接した地点の南角地）で、板垣家は金物屋を営んでいて、敷地は現在のそれより西側にずっと広いものだったと言います。その形は、江戸時代の街道などに面した商家に一般的な間口が狭く奥行きが深い長方形で、敷地の奥に隠居所があったそうです。かつて敷地の北側に道はなく、旧日光街道沿いにずっと家が続いていました。敷地北側の道（前記中央図書館南側の道路）ができたのは昭和十三年（一九三八）で、この道が敷地の一部にかかってしまい土地の形が変わるため、それまでの建物を取り壊して新たに家建て（この建物が『足立史談』六五四号に掲載した写真の上棟式の建物で、現在の和食板垣）現在まで持ち伝えてきたとのこと。

（郷土博物館 専門員）



トロッコ施設道・板垣家敷地などの位置（元図：荒川改修工事平面図）



**横槌**  
高さ 37 cm 打撃部 17 cm  
底部 (最大) 15 cm

■横槌とは 槌(つち)は、ものを打つたり潰したりする道具です。横槌は、持ち手と打撃部が直線上にあり、頭部(打撃部)の側面で打つことからよぶ名前です。写真の横槌は、おもに藁を打つために使われた道具です。丸太を削り出して持ち手が作られており、継ぎ目がなく一体化しているので、柄が緩むこともなく頑丈です。打撃部を上にして、片手で持ち手を握り、振り下ろして打ち付けます。

横槌蛇ともよばれ、胴が太くなっていてこの横槌に形が似ているためについでに名前です。  
■藁打ち作業 この横槌は藁打ちに使いますが、縄、草履や草鞋など、藁細工をつくる準備作業には欠かせません。  
藁は乾燥して保存されています。藁細工を作るためには、まずハカマとよばれる根本の茎の周りについている下葉をとります。この作業を藁すぐりといいます。藁すぐりの済んだ藁は、水で軽く湿らせます。乾燥しきった藁は曲げるとポキポキと折れてしまい、横槌で打つとちぎれてしまうからです。  
こうして水気を与えた藁を今度は横槌で打ち、茎を潰して柔らかくするのです。とくに根本部分は固いため、ここを中心に打ちます。左手で

藁を一束つかみ、安定した平たい石の上などに乗せて、右手で横槌をトン、トン、と振り下ろしながら、左手で藁束を広げたり、位置をずらしたりしながら打つのです。このとき、腕に力を入れて打つのではなく、横槌の重さを利用して振り下ろす感じで行うのがコツです。そのため、横槌は重さがある方が効果的で、硬く目の詰まった木で作られていました。藁が、くったりするくらいに柔らかく打ちあがると藁加工の準備が整います。  
■藁打ち石 藁を打つ台になる石を藁打ち石といい、これも重要なものでした。  
積雪地帯では、家のなかで冬場に藁仕事を集中して行うため、土間の隅に直径が30センチメートルほどの丸い大きな石を埋め込んであり、藁打ち作業に備えていました。作業の便宜を図るため、家のなかに取り付けてしまったわけです。  
縄作りやしめ飾り作りなど、販売用にたくさんさんの藁加工をするには横槌でいちいち打つ作業では追い付かなくなりません。そのため、掛矢(かけや)とよばれる大型の木槌で下打ちをしたり、後年はローラーに挟んで藁を潰す形で柔らかくする手回しの藁打ち機も作られました。

■横槌の習俗 全国的に見ると、横槌には、変わった使用方法が伝承されています。  
新潟県、静岡県、長崎県など。また、葬式が一年に二回続いたとき、「故人が友人を引いていく」という語呂合わせから避けられる友引の日に葬式を行わなければならない場合に、やはり、縄をつけて家の周りを引きずったり、葬列のときに棺のそばで引きずったりして葬儀が続くのを避けることが行われました。直接、棺に横槌を入れるというところもあります(静岡県、三重県、秋田県など)。  
なぜ、横槌をこのような目的外使用をするのかは、定かではありませんが、「横槌の呪力」を期待するもので、「蛇やモグラに横槌を示すことは、横槌の威力によって、打殺を予告することになり、かつ、蛇やモグラを発生せしめる大地を鎮めることにな」と説かれ、葬式の横槌については、「横槌の呪力によって、「友引きをする死霊を抑える」と説明されています。〔言霊の民俗誌〕野本寛一〕  
これまで、杵や箕についても呪物としての一面があることを紹介しましたが、横槌については、その使用方法から打ち鎮めるものとしての、力を発揮すると考えられるのです。  
(郷土博物館学芸員 萩原ちとせ)